第一章　教師になるまで、神父になるまで

「隠れキリシタン」の末裔

私は大正の終わりのころ、長崎市の浦上に、十一人兄弟の十人目として生まれました。家は、長崎市を見下ろす小高い丘の上にありました。

長崎は、一五五〇年（天文十九年）にフランシスコ・ザビエルが平戸を訪れて以来、全国でもひときわキリスト教が人々のあいだに広く深く行きわたっていったところです。キリシタン大名の有馬晴信らの名から長崎を連想する方もいるでしょう。大浦天主堂をはじめ、戦前に建てられて現在も残っている教会の約半分が長崎に集まっていることからも、この地におけるキリスト教の歴史をうかがうことができると思います。

私の先祖も、江戸時代には熱心なキリシタンの一家でした。

ご存じのとおり、江戸時代、徳川幕府はキリスト教を信じることを禁止していました。江戸時代の早い時期から密告を奨励し、「踏み絵」を実施するなど、江戸幕府にとってキリスト教は大きな脅威でさえあったようです。中でも長崎は国内でも熱心な信者の多い地域でしたから、監視の目も特に厳しく、奉行所はひそかに信仰を続ける「隠れキリシタン」たちを積極的に検挙し、投獄していきました。「踏み絵」は長崎で最初に実施されたとする文献もあるようです。

キリシタンの大々的な摘発は「くずれ」と呼ばれ、全国でしばしば何百人から何千人というキリシタンが捕らえられ、処刑されました。浦上は、一七九〇年（寛政二年）に二百人近くが捕らえられた「浦上一番くずれ」以降、一八六七年（慶応三年）の「浦上四番くずれ」まで、四度にわたる大検挙に見舞われています。

私の祖先たちは、キリシタンたちがかたまって住んでいるのは危険であるということで、分散を命じられ、鹿児島に流れていきました。

やがて幕末になると、鎖国を解いて国交を結んだ各国から江戸幕府のキリスト教迫害政策を批判する声が高まります。こうした諸外国の圧力により、一八五六年（安政三年）に幕府は長崎と下田で「踏み絵」を廃止していました。しかし、徳川幕府がたおれ、明治政府となってからも、キリシタンへの弾圧政策がすぐに全面的に解かれたわけではありませんでした。

ところが、開国間もない日本政府は、自国に不利な条件の条約を結ばされ、その後、改正に苦労したことからもわかるように、欧米諸国に対して決して強い立場にあったわけではありませんでした。

維新から間もない日本政府は市中に高札を掲げ、その中で「よこしまな宗教であるキリスト教を信じることを禁止する。」とうたいました。すると各国の公使らはこれに強く抗議し、日本政府は

急遽、「よこしまな宗教とキリスト教は禁止」というふうに微妙に表現を改めることで非難をかわしました。

フランスをはじめ各国が信教の自由の理念を日本政府に訴える中、折しも開国時に結んだ不平等条約の改正のために欧米に赴いた岩倉具視らの使節団が日本のキリスト教弾圧政策をめぐり強い非難を浴びたのをきっかけに、日本政府はついに一八七三年（明治六年）にキリシタン禁制の政策を撤廃することとなります。

これにともなって、各地に散り散りになっていた信者たちはそれぞれの故郷に帰っていきました。

私の先祖たちも浦上にもどってきました。祖先の地にもどってきたのはいいのですが、土地や財産は没収されていましたので、文字どおりゼロからのスタートを余儀なくされました。そこで、私の先祖は町はずれの辺鄙な丘の上に居をかまえることにしたのでしょう。私の家のあたりには、そうした「隠れキリシタン」の子孫たちがたくさん住んでいました。

「教え」の道へ

私の両親も、熱心なカトリックの信者でした。

ふだん、キリスト教にあまりなじみがないという方に簡単にお話ししておくと、キリスト教には

伝統的な宗派である「カトリック」のほかに、十六世紀にヨーロッパで起こった宗教改革の際にカルビン・ルターが唱えた「プロテスタント」という立場があります。テレビなどでもよく、結婚式の進行役をつとめたり、教会でお話をしたりする人を目にしますが、こうした立場の人のことをカトリックでは神父といい、プロテスタントでは牧師といいます。それぞれの教義の違いについてお話しすると長くなってしまいますが、このくらいは覚えておいてもいいでしょう。

さて、私も小学校の四年生のころから、朝の五時ごろに起こされて、家族とともに近くの教会に通うようになりました。冬の時分なら朝の五時といえば、まだ真っ暗ですから、寒い中、提灯を手に出かけていきます。家の近くといっても家は丘の上にあります。獣道のような、道とはいえないような道を、行きは下りですから三十分ぐらいですが、帰りには四十～五十分をかけて登って帰ってきます。

当時、私自身は決して熱心な信者ではありませんでした。それほど一生懸命に勉強をしたわけでもなく、学校から帰ってくればビー玉で遊んでいるような、普通の男の子でした。

小学校六年生になって、私は母から長崎市にある「マリア学院」というカトリックの神学校に行くことを勧められました。しかし、そのときも、見学に行ったときにたまたまみんなが昼休みに野球やテニスに興じているのが楽しそうに目に映ったために「マリア学院に行ってもいいよ。」と気

軽に答えた程度のものだったのです。

私は小学校時代、特段成績が良いというわけではありませんでした。平均すると、オール3といったところでしょうか。しかし、カトリックの信者が多い地元では、マリア学院に進むということは、一つの名誉でした。マリア学院は神学校といいましたが、わかりやすくいえば修道院です。つまり共同生活をしながらカトリックの教えを学び、やがては神父となるための修行をするのです。ですから、近所の人たちも家族も、とても喜んでくれました。

マリア学院は全寮制の学校でした。朝早くから夜寝るまで、食事以外の時間はチャペルでのお祈り、授業、掃除などのスケジュールがびっしりと詰め込まれていて、まるで軍隊なみでした。授業は一般の中学のような国語や数学、英語などがあり、そのほかにフランス語や旧約聖書の授業もありました。

卒業までの四年間はたいへん厳しい生活の毎日でした。一緒に入学したメンバーのうち、最後まで残ったのは、実に一割程度だったのではないでしょうか。

さきほど、十六世紀に日本にやって来たザビエルの話をしました。キリスト教の宣教師たちは、昔から、キリストの教えを伝えていくために、世界中にわたっていきました。何か月も船に乗り、まったく見も知らぬ、言葉もわからない異国の地に赴くのは、体力的にも精神的にもなみたいていのことではありません。同じようにキリストの教えを伝えていく人間を育てていくためには、やはり厳しい生活に耐え、それを乗り越えられる人間であるかどうかをまず見きわめなければならなかったのかもしれません。

東京・九段の暁星学園へ

一口にキリスト教といいますが、世界には、キリスト教の教えを広めていくための団体である修道会というものがたくさんあります。中世以来、それぞれの修道会は修道士や宣教師たちを世界中に派遣していきました。十六世紀に日本にやって来たフランシスコ・ザビエルは、イエズス会という修道会の宣教師です。

宣教師たちはそれぞれが訪れた地に学校をつくり、教えを広める努力をしていきました。みなさんも日本史の時間に「ザビエルは、コレジョやセミナリオなどの学校をつくって布教に努めた。」と教わったのではないでしょうか。コレジョとは、つまりカレッジ、またセミナリオとはゼミナールのことです。

現在でも、キリスト教を背景に持つ学校のことをよく「ミッション系の学校」とか「ミッション・スクール」といいます。もともと「ミッション」とは「任務」という意味の言葉で、つまり「ミ

ッション・スクール」とはキリストの教えを知らない人々にそれを伝え、人々を救済していくという「任務」を遂行するためにつくられた学校であることを意味しているのです。

わが国にも、かつてこうしたいろいろな修道会によって建てられた学校を母体とする教育機関がたくさんあります。イエズス会による上智大学や栄光学園、セント・ポールによる立教大学や白百合学園、また聖心女子学院は聖心会、雙葉学園はサン・モール、聖光学園はクリスチャンブラザーズという修道会によってつくられた学校です。

私が行ったマリア学院は、マリア会という修道会が運営する学校の一つでした。マリア会は十九世紀の初頭、フランスで創設されました。当時のフランスはフランス革命後、時の為政者が人々を無宗教に導く政策をとったために人々の信仰心が薄れ、そのため社会がとても荒廃していた時期でした。そんなとき、ギヨム・ジョセフ・シャミナードという一人の神父が、すさんでしまった社会を建て直すことを目的に創立したのがマリア会です。シャミナード神父は、そのためには貴族から庶民にいたるまで、あらゆる青少年に対して教育を行っていくことこそが大切であると考え、次々に学校を建てていきました。

日本にマリア会の宣教師がやって来たのは一八八八年（明治二十一年）のことです。五人の宣教師たちは横浜港に降り立つと、カタカタと音をたてる履き物に目を奪われ、人々が漬け物を口にふくんでバリバリと音を発する様に目をみはったといいます。

以来、マリア会は一八九二年（明治二十五年）には九州の長崎に海星学園を、また一八九八年（明治三十一年）には大阪に明星学園、一九〇一年（明治三十四年）には横浜にセント・ジョセフ学院を創立していきました。

東京では、マリア会の宣教師が一八八八年（明治二十一年）に京橋に創設した学校が、その後、麹町に移って暁星学校と名乗っていました。これが現在の九段の暁星学園の母体です。

私は、長崎のマリア学院を終えると、上京してこの九段の暁星学園中学（旧制の中学で、現在の高校にあたります）に編入することになりました。神父となるために必要な、さらに上の教育を受けるようにということです。

時に一九四一年（昭和十六年）四月、日中戦争が長期化し、やがてその年の十二月には日本がハワイの真珠湾を攻撃してアメリカと戦火を交えようとしていた時期です。そのため、入学後は富士山の裾野で軍事教練を受けたりすることもありました。軍事教練というのは、いってみれば母国を守るための技術を身につけることを目的としていますが、国を守るためには、しばしば敵を倒す、つまり人を殺すという行為に出なければならない場合もあります。それはキリストの教えと矛盾しないのか、私は葛藤にさいなまれました。当時私たちは学校で、戦争は国が行っていることであり、

国のために戦うことはキリストの教えに反するものではない、と教えられました。

また、キリスト教の信者として、神社に参拝することにも抵抗を覚えました。当時、聞かされたところによれば、バチカンの法王庁と日本のカトリック教会のあいだで話し合いが持たれ、神社ではあくまで儀礼的に敬意を表することとすることが決められたそうです。私たちも神社で手を合わせながら、心の中で「頭を下げるのは、拝むことではないのだ」と唱えたものです。

初誓願のとき

私は暁星学園の旧制中学に在学するあいだ、一年間休学して、修練院に入りました。修練院は、やがて神父となる人間として、さらに修養を重ねるところです。

修練院には、修道院とはまた別の厳しい生活が待っていました。どう厳しいのかというと、たとえばラジオを聞くことも新聞を読むことも許されないのです。つまり俗世間を離れるということです。

仏教の世界にも出家という言葉があり、それは世俗を離れて純粋に信仰の世界に生きることを意味します。これと同じように、世間から隔離された環境に身を置いて、一生涯、信仰生活に身を置くことができるかどうかを自身で確認し、同時にまわりからもそのことについて見きわめを受ける

精神的にも影響を受けた姉（上）、そして弟（左）と。

東京・九段の暁星中学（旧制）時代。無口な、おとなしい子どもでした。

場所が修練院なのです。

修練院では、来る日も来る日も、お祈りと黙祷、そして新約聖書や旧約聖書について、また教会の歴史などについて学び、さらに三百条あまりもあるマリア会の憲法の暗記なども課されました。そして、その合間をぬって一日一時間、労働の時間があります。掃除やミシンがけのほか、農作業などもありました。私は動物飼育の役を割り当てられ、メスの山羊の担当となって、暑い日も寒い日も、また雨風がひどい日も小屋のところへ出ていって草を与え、乳をしぼりました。

修練院ではやがて、そうした厳しい生活に耐えて、認められた者に対して「誓願」の機会が与えられます。誓願とは「清貧・貞潔・従順」を誓い、俗世間の価値観を離れて、一生涯、信仰に身を捧げることを誓う儀式です。

「清貧」とは生涯、財産を持たないということです。家財や土地家屋を所有しないことはもちろん、衣服など生活のための道具や物品も最低限のものしか持たないことを誓います。

また「貞潔」とは、結婚をせずに生涯独身を貫くことです。私は当時、小学校を卒業してマリア学院に入って以来、女性と接触したことがありませんでした。もちろん、一人の男である以上、女性に憧れをいだく機会がまったくなかったかといえば、決してそんなことはありません。気持ちが傾いても、それに打ち克つ、そんな自分自身との戦いにこそ意義があるのだと思います。

そして「従順」とは、命令に対して服従することです。かつて宣教師たちが、所属する修道会からの命令一つで故国を離れて見知らぬ異国に赴いたのも、従順であることに対する誓いがあったからです。

私は初めての誓願のとき、かつてフランスでシャミナード神父が、青少年の教育を目的としてマリア会を創設し、それに一生涯を捧げたことを思いました。彼は、荒廃してしまった社会を建て直すためには子どもたちへの教育が大切であると考え、学校を開いたのでした。また、明治のころにはるばるフランスからやって来て学校をつくった五人のマリア会の宣教師たちの、言葉も生活習慣もわからない異国の地に骨をうずめようという覚悟や情熱に思いを馳せました。そして、私自身も生涯を信仰と教育に捧げようと決心しました。

誓願の儀式では、神父たちの前で聖書に手を置き、キリストの教えの道に生きることを誓います。実は、誓願は一度だけではなく、その後も何度か更新が行われます。中には更新をせずに信仰の生活をやめてしまう人もいるのですが、私の決心はすでに初誓願の段階でゆるぎないものでした。

人間は物質的な喜びだけではなく、精神的な喜びも求めるものです。両方を手に入れるのはむずかしいし、そうしようとするからつらい思いもします。財産を持たず、家族への配慮や心配もない自由な身だからこそできることもあるでしょう。聖書に手を置いた私の胸の中は、これで自由が得

られる、教育の道を思うがままに進むことができるという喜びでいっぱいでした。
当時、聖書の中の次の一節が、私の心をとらえていました。

こころの貧しい人たちは、さいわいである。
天国は彼らのものである。
悲しんでいる人たちは、さいわいである。
彼らは慰められるであろう。
柔和な人たちは、さいわいである。
彼らは地を受け継ぐであろう。
義に飢えかわいている人たちは、さいわいである。
彼らは飽き足りるようになるであろう。
あわれみ深い人たちは、さいわいである。
彼らはあわれみを受けるであろう。
心の清い人たちは、さいわいである。
彼らは神を見るであろう。

平和をつくり出す人たちは、さいわいである。
彼らは神の子と呼ばれるであろう。
義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである。
天国は彼らのものである。

（『マタイによる福音書』より）

一年間の修練所生活を終えて誓願を果たした私は、暁星学園にもどり、旧制中学の五年生になりました。一九四四年（昭和十九年）のことですから、もう戦争も終わりに近いころです。
私たちは学校へは行かず、品川の近くの大井町の工場に勤労動員としてかり出され、そこで防毒マスクの生産に従事していました。戦争は敗色が濃くなり、日本もいよいよ本土決戦を覚悟していた時期です。日本の当局は、上陸してきたアメリカ軍が攻撃に毒ガスを用いることを想定していたのでしょう。
すでに爆撃機が東京上空にやって来ていました。空襲警報が鳴ったり、実際に爆撃を受けたりして電車が止まることもありました。また、食べ物にも不自由していて、日々、命の保証がない中、飢えに苦しみながら信仰と戦っていました。

暁星学園を卒業した一九四五年（昭和二十年）三月、ついに私のところにも「赤紙」が送られてきました。実家の方に、長崎の第五十五部隊に入隊せよ、との召集令状が届いたのです。出征は栄誉とされていましたから、私も表面では意気盛んを装っていましたが、やはり帰省の足取りは重いものでした。

ところが、六月に実家にもどってみると、どういうわけか、いよいよ明日には出発という日になって、市役所から「自宅で待機せよ」との延期命令が届きました。

農作業を手伝いながら実家で日々をすごすうちに、やがて本格的な夏の日射しに目を細める季節となりました。そして八月に入り、いつものように暑いその日、長崎に原子爆弾が投下されました。

私の家は爆心地から十キロメートルも離れていないところにありましたが、ちょうど小さな山の陰に入る位置にあったために熱線の直撃をまぬがれ、半壊ですみました。しかし、ちょうどそのとき、山の上にいた長兄はひどいやけどを負い、それから数年後に亡くなりました。

上智大学へ

終戦後、しばらく私は長崎にとどまりましたが、やがて東京のマリア会から早く東京にもどるようにとの指示がありました。そして翌年、上智大学に入って、神父となるために必要なラテン語や

哲学を専門的に学ぶことになりました。

さきほどから「神父」という言葉を使っていますが、これはカトリックの世界でミサと呼ばれる儀式を執り行うことのできる位のことで、司祭とも呼ばれています。ミサとは、礼拝堂や教会で信者を前に聖書を朗読したり、お説教をしたり、祈りを捧げたりする儀式のことで、基本的には毎日、また特別な日には大々的な行事として行われます。

神父になるには、どこかの修道会に所属し、神父として叙階されなければなりません。いくらキリスト教を熱心に信じていても、勝手に教会を建てたり、神父を名乗ったりすることはできません。

また、神父になることができるのは男性だけです。英語では「ファザー」と呼ばれることから、日本語では「神父」という文字があてられたのでしょう。ちなみに、当時の私の立場、つまり誓願を立てて修道院での信仰の生活に入った修道士は英語では「ブラザー」、女性の場合、つまり修道女は「シスター」と呼ばれます。修道院の中では同じ修道会のメンバーとして、立場は平等です。同じ会則のもとに生活する「兄弟」であるということです。

神父となるためには、キリスト教をはじめとするいろいろな宗教や哲学のほか、ラテン語などの外国語を深く専門的に学ぶ必要があります。当時の上智大学には、私と同じように神父を目指す学生がたくさんいました。

現在の上智大学はたいへん大きな、また優秀な大学として知られていますが、当時はまだ学生は男子だけ、しかも千人程度の小所帯で、現在のように誰でも知っているような有名な大学ではありませんでした。

ただし、教育に対する強い信念を持った神父たちが教授として百人も送り込まれていて、教育の体制や内容は非常に優れたものであったと思います。当時のローマ法王は、上智大学を運営するイエズス会の総長であった人でしたが、日本という場所を重用視して、全世界から毎年二十人の宣教師を五年にわたって送り込んでいました。これでは教育が充実しないわけがありません。

現在、大学と呼ばれるところで、「あそこは規律が厳しい」という話を聞くところを私は知りませんが、当時の上智大学は人間教育にも非常に力を入れていて、礼儀や節度についてもたいへん厳しく、遅刻をすると教室には入れてもらえませんでした。授業がはじまると、教授が教室にカギをかけてしまうのです。教室の入口には神父が立っていて、挨拶についての指導をしていました。きちんと出席をとり、代返ができないように事務員が回って、一人ずつ出席を確認していました。

すでに当時から、学生はキリスト教の信者ばかりではありませんでしたが、学問はもちろん、人間としての教育も厳格に行う大学であるということから、娘の入学を熱心に希望する親が少しずつ増えていき、そうして入ってきた優秀な女子学生たちが大学を大きくしていきました。

上智大学に入学したころ

私は、前半の二年はラテン語の教育をみっちり受けました。ラテン語の教科書などなく、テキストは教授たちによるオリジナルでした。試験は厳しいものでしたが、パスしないと落第となってしまいますので必死でした。二年目には授業の半分がラテン語で行われ、しかも進みが速いので、ついていくのがたいへんでした。

上智大学での五年間は、苦労に苦労を重ねた時期でした。学業がたいへんだっただけではなく、終戦から間もない時期の五年間ですから、食べるものも着るものもままならなかったのです。

スイスの神学校に留学

さきほど、誓願には何度か更新の機会が与えられるとお話ししましたが、大学を卒業すると私は、「終身誓願」を立てることが認められました。これは無期誓願ともいい、文字通り、命あるかぎり教えの道に生きることを最終的に誓うのです。儀式では、床に横になり、棺桶をかぶせられます。つまり俗世間では死んだものとして、生涯、修道院や教会で暮らし、信仰のために生きていくことになります。また、修道会の指示があれば、それに従う義務があります。身内に不幸があっても、帰れる保証はありません。そのくらいの覚悟を求められるのです。

終身誓願の機会を与えられることは、神父になるのを認められたことを意味します。しかし、実際に神父になるにはさらに修行の仕上げや見習いが必要であるということで、上智大学を卒業した私は、今度はスイスのフリブール大学という神学校への留学を命じられました。

それまでの数十年間は、世界中で大きな戦争が絶え間なく続いていて、地球上のあちこちでたくさんの人々が亡くなりました。神父や宣教師もたくさん戦場にかりだされ、あるいは敵の攻撃の犠牲となって命を落としたことでしょう。そのため新たな人材の育成が急がれていたのかもしれません。

一九五一年（昭和二十六年）八月、二十五歳の私は、横浜港から「ラ・マルセイエズ号」でフランスに向かいました。三十一日間の船旅を経てマルセイユに到着すると、そこからは汽車に揺られてスイスへ向かいます。

フリブールという町は、スイスの首都であるベルンから南西へ百キロメートルほどのところにあり、歴史的には首都のベルンよりも古い町です。十六世紀に宗教改革が起こった際には真っ向からこれに反対する立場をとった、篤い信心を持ったカトリックたちの町でもあります。

私はそこで四年をすごし、そしてサン・ミッチェル教会で、司祭としての叙階を受けました。晴れて神父となることができたのです。

司祭叙階式は、たとえていえば結婚式のような一世一代の舞台です。地元スイスはもちろん、ス

ペインやフランス、そして戦勝国として羽振りの良いアメリカからも、花婿ならぬ新・神父のためにその家族や親戚、友人らがたくさんかけつけてきました。しかし私には、日本から家族を呼ぶなど夢のまた夢のような話です。

神父としての、いわば初仕事となる初ミサも司祭叙階式同様にまわりの人たちに支えられ、盛りたてられて晴れがましい舞台となるのですが、極東の小さな島国からやって来た青年に関心を持つ人はいませんでした。

しかし、地元スイス人のジョニー神父という方が、ご自身の教会に私を呼んで初ミサを行ってくださると申し出てくださいました。スイスにはフランス語圏とドイツ語圏があり、ジョニー神父の教会はドイツ語圏にありました。ドイツ語ができずに不安な面持ちでいる私にジョニー神父は

「一生懸命やれば、大丈夫だ。」

と声をかけて励ましてくださいました。このときの感激は、いまも忘れることができません。

教会にとって、新たに誕生した神父の初ミサは盛大なお祭りのようなイベントです。ジョニー神父の教会、セントミセル教会はアルプスの山々に囲まれた美しい教会でした。そこで半年前から準備を進め、そして三千人もの信者の方々が集まって、私の初ミサを盛りたててくれました。侍者を伴った華やかな大行列の光景は、今でも鮮明に脳裏に焼き付いています。

スイスのフリブール大学

ともに海を渡った学友と。フリブール大学に到着した日に、大学の前庭にて。

お金を持っていなかった私は、ジョニー神父にまったく御礼ができませんでしたが、後日、暁星学園の校長となってから、航空券を彼のところに送り、日本に招待しました。ジョニー神父は車いすで日本にやって来られ、長崎の原爆の跡を見ることを希望されましたので、ご案内をしました。

フリブール大学での四年間を終えたあとも、私は、しばらくスイスにとどまっていたかったのですが、やがて日本のマリア会より早急にもどるべき旨の連絡がありました。私は、キリストの教えに仕える者としての大きな節目を迎えた、思い出深いこの地をあとにすることとなりました。

日本へ向かう途中、イタリア、南フランス、北米を視察し、スイスを発って三か月の後に帰国した私を待っていたのは、出身地長崎の海星学園高等学校教諭就任の辞令でした。

時に一九五五年（昭和三十年）、日本では自由党と民主党が合同して自由民主党が結成され、「もはや戦後ではない。」が合い言葉のようになっていました。神武景気と呼ばれる爆発的な好景気に見舞われ、世の中が活気を取りもどしていた時期です。私は、二十代最後の年を迎えていました。

セントミセル教会での私の初ミサには、地元の3000人もの信者のみなさんがかけつけて、私の一世一代の舞台を盛りたててくれました。

初ミサを終えて、みなさんと。左から２番目がジョニー神父です。